

## 三方沙弥万葉歌の『古今和歌六帖』における伝承と受容

田頭正浩

### はじめに

『古今和歌六帖』は、『万葉集』から『後撰和歌集』の頃までの歌約四五〇〇首（重出歌を含む）を、二五項五一〇余題に分類して収めた類題和歌集であり、作歌の手引書を意図したものである<sup>①</sup>。平安時代の文芸世界から愛好珍重され、『伊勢物語』『源氏物語』『蜻蛉日記』『枕草子』等にも『古今和歌六帖』の歌が見られるところから、広く引用され影響を及ぼすところが大であったと思われる<sup>②</sup>。『古今和歌六帖』には、約四五〇〇首中、諸家によって歌数に異同はあるが、千百首から千二百首ほどの『万葉集』の歌、もしくは『万葉集』の歌と密接な関係のある歌を見ることが<sup>③</sup>できる。

『万葉集』との関係性については先行研究も含め後にふれることにするが、『古今和歌六帖』には『万葉集』巻二の一二五番歌である三方沙弥万葉歌と酷似するものの作者を異にする歌が載せ

られている。一方、『万葉集』においても三方沙弥万葉歌の異伝歌・伝承歌である巻六の一〇二七番歌が存在する。『万葉集』における三方沙弥万葉歌とその異伝歌、『古今和歌六帖』に載せられている酷似する歌の三首をあわせて考えることによって、本論文では三方沙弥万葉歌の伝承過程と、人々がいかにしてこれらの歌を受容していったのかという問題について考察する。また、『古今和歌六帖』と『万葉集』をあわせ用いて研究することの意義も考える。

なお、本論文での『万葉集』の本文及び題詞・左注は、佐竹昭広氏・木下正俊氏・小島憲之氏共著『補訂版 萬葉集本文編』（塙書房・一九九八年補訂）、『古今和歌六帖』の本文は『新編国歌大観第二巻 私撰集編 歌集』（角川書店・一九八四年）所収の『古今和歌六帖』に拠る。

## 一、「古今和歌六帖」と『万葉集』

三方沙弥万葉歌の伝承を考える前に、『古今和歌六帖』と『万葉集』との研究についてまとめる。先にも述べたように『古今和歌六帖』は、約四五〇〇首中、千百首から千二百首ほどの『万葉集』の歌、もしくは『万葉集』の歌と密接な関係のある歌が所収されている。すなわち、『古今和歌六帖』所収歌の約四分の一が『万葉集』と何らかの関係がある歌であるため、当然『万葉集』との関わりが重要視されてきた。<sup>4</sup>

『古今和歌六帖』に『万葉集』の歌を多く掲載されることは、契沖がはやくこれをいい、山本明清の『古今和歌六帖標注』はそれを一層明らかにした。<sup>5</sup> また、石塚龍磨の『校證古今六帖』が万葉採歌の考証に詳細を極め、田林義信氏によってその未完の原稿が刊行された。<sup>6</sup> さらに平井卓郎氏の『古今和歌六帖の研究』及び中西進氏の『古今六帖の万葉歌』も『古今和歌六帖』と『万葉集』について詳細に説いたものとして特に注目される。

『古今和歌六帖』に載る万葉歌が、資料の乏しい古点乃至次点期の『万葉集』の読み方の状況を知ることのできる資料として様々に研究されてきた。<sup>7</sup> 『古今和歌六帖』の成立は九七〇年代から八〇年代にかけてとされている。青木太郎氏が述べるように「これは後撰集の編纂事業とともに『万葉集』の訓読作業が開始されてからそう遠くないこともあり、『六帖』に収められた万葉

歌はこの古訓を残すものも少なからずあると見なされている。」<sup>8</sup> ことが所以である。また、『古今和歌六帖』に収録される『万葉集』の歌、もしくは『万葉集』の歌と密接な関係のある歌に関して、平井卓郎氏が「総じて伝承性に富み、また民謡的性質の歌が多い」とし、中西進氏も『万葉集』の流伝、後世の受容という面から『古今和歌六帖』をとらえ論じた。中西進氏は『古今六帖の万葉歌』において「本文によって万葉歌を指摘した研究は田林義信氏が「校証」を上梓したものが唯一の印行書である。」とし『古今和歌六帖』の中より、万葉歌、およびそれに準じる歌を抽出し、それらの歌がいかに万葉歌と関連するのかを詳細に検討した。平井卓郎・中西進両氏は、万葉歌の「伝承」という側面からも『古今和歌六帖』を論じた。続いて、河野頼人氏も「『古今和歌六帖』に採られてゐる『万葉集』の歌若しくは『万葉集』と密接な関係のある歌千百首乃至二百首について、『万葉集』から直接採歌されたと考へられるもののある一方では、奈良朝以来伝承されて来た歌をその供給源とするものも少なからず含まれてゐるのではないか」という見解を示した。以上からも分かるように、『古今和歌六帖』と『万葉集』との研究については、万葉歌の読み方の問題と万葉歌の伝承の問題とが大きく論じられてきたのである。

## 二、三方沙弥万葉歌

本論文においては『古今和歌六帖』と『万葉集』とを用いて三方沙弥万葉歌の伝承について考えていくため、ここでは三方沙弥万葉歌の『万葉集』研究の側面から考察する。

まず、三方沙弥という人物についてである。賀茂真淵の『万葉考』に「傳はしらず」とあるように、古くから多くの注釈書では伝未詳とされている。川上富吉氏は「三方沙弥伝考―還俗官僚の文学的伝記―」において、三方沙弥なる人物は、「(1) 山田三方と同一人物(2) 三方氏の沙弥という名の人物(3) 三方氏の沙弥なる人物の三説が鼎立する。」と諸説を整理した上で「三方沙弥という呼称は、山田史三方の致仕後の呼称であることを確認すべきであると提唱したのである。」と述べ、持統紀に見える山田史三方説を唱えている。しかしながら私は、川上富吉氏の説はあくまでも推測にすぎないものであると考える。可能性はあるものの、山田史三方であると完全に断定するまでには至らないと判断した。なぜならば、同時代における三方を連想させる名前に、山田史三方のほか、『統日本紀』天平十九年十月に春宮少属御方大野や、『統日本紀』延暦三年正月に従五位下を授けられた三方宿禰広名などもあげられ、山田史三方に特定することには疑問が残るからである。寺川真知夫氏は、巻二の久米禪師の相聞をめぐる論考で、「久米禪師の「禪師」は、巻二では氏族名とも

に位階や姓名を記すのに、ここでは直・朝臣など姓をつけないから、僧侶の称とみてよく、久米氏出身とする禪師といっている。」と述べている。このことは同じ巻二に記される三方沙弥を考えることにも援用でき、三方沙弥も、直・朝臣などの姓をつけないことから考えて、僧侶の称とみるべきであると考える。よって三方を氏か名かの判断は留保するが、「三方沙弥」とは「三方」という名の沙弥(仏教者)である」と私は判断する。ただし、それ以上のごとは分ならずやはり伝未詳の人物とすることが穏当である。

次に三方沙弥の万葉歌について考える。三方沙弥の万葉歌は、園臣生羽の女との相聞中に二首(巻二・一二三番歌・一二五番歌)、およびその伝承された歌一首(巻六・一〇二七番歌)、相聞一首(巻四・五〇八番歌)、人麿集の一首(巻十・二三一五番歌)、久米広繩によって伝承された長歌と反歌(巻十九・四二二七番歌・四二二八番歌)の長歌一首短歌六首がある。本論文では、巻二の一二三番歌から一二五番歌である園臣生羽の女との相聞と、一二五番歌の異伝歌・伝承歌である巻六の一〇二七番歌を考える。

巻二の一二三番歌から一二五番歌である園臣生羽の女との相聞とは次の歌群である。

三方沙弥娶園臣生羽之女未経幾時臥病作歌三首  
多氣婆奴礼 多香根者長寸 妹之髮 比来不見尔 搔入津良

武香 三方沙弥  
 人皆者 今波長跡 多計登雖言 君之見師髮 乱有等母

娘子

橘之 蔭履路乃 八衢尔 物乎曾念 妹尔不相而 三方沙弥

これらの歌は、題詞によれば、「三方沙弥が園臣生羽の娘を娶ってあまり時も経っていないのに、病に臥して作った歌三首」である。園臣生羽の女も伝未詳の人物である。阿蘇瑞枝氏は「結婚後間もなく三方沙弥が病床に臥して、妻である園臣生羽の娘のもとに通えなくなり、その後の妻の様子を気掛かりに思う夫の歌と、夫への変わらない愛を誓う年若い妻の歌である。」と述べている。一二三番歌は、三方沙弥の園臣生羽の娘に対する想いと、会えない生羽の娘が心変わりをしていないかという不安とが、「髪」を通して伝わってくる歌であり、一二四番歌は、三方沙弥の歌に対して、「髪」を介して、生羽の娘の三方沙弥に対する変わらぬ想いが伝わってくる歌である。一二五番歌は、独詠的な歌であり、三方沙弥の心の様子が「八衢」に喩えられて、より具体的に伝わってくる歌である。「橘之 蔭履路乃」は、次の「八衢」を起こす序詞であるとされている。「八衢」のチマタは、道（チ）の分かれたところ（マタ）の意であり、「八衢」は、多くの方向に道の分岐するところを言うものであり、あれこれと思い迷う状態を表す喩えとも考えられる。

続いて、一二五番歌の異伝歌・伝承歌が、次にあげる巻六の一

〇二七番歌である。

（秋八月廿日宴右大臣橘家歌四首）

橘 本尔道履 八衢尔 物乎曾念 人尔不知所知

右一首右大辨高橋安麻呂卿語云 故豊嶋采女之作也 但或

本云 三方沙弥戀妻苑臣作歌 然則豊嶋采女當時當所口吟

此歌歟

歌意は阿蘇瑞枝氏の『萬葉集全歌講義』によると、「天平十年八月二十日に右大臣橘諸兄の宅で開かれた宴の歌。（中略）安麻呂によって披露された歌は、巻二の相聞の部に載る三方沙弥の歌（一二五番歌）と少し違いのあるものの大部分は同じであるから、左注にいうように、豊嶋采女が古歌を一部改めて、宴で披露したのである。宴席では、出席者によって作られた歌が披露されるだけでなく、古歌や他の人物によって詠まれた歌が披露されることもあり、それがそのまま記録されている。」ものである。伊藤博氏は、「この「或本」は巻二を直接さすのではあるまい」とし、『万葉集』以外の文献にも三方沙弥の歌が記されていた可能性も述べている。土橋寛氏は、「橘の影踏む道」そのままでは諸兄に対して失礼なため「橘の本に道踏む」と改め、結局もその場にふさわしく「人に知らえず」と改めたと論じており、初句に「橘」が「橘家の宴席でこの歌が披露された点を思うならば、初句に「橘」の語が読み込まれていることを重視しなければならない。「橘」

を冒頭に置くこの古歌は、主人諸兄への敬慕を込めて持ち出されたものに相違ない。」と指摘し、「橘」の語と「橘諸兄」との関連性を論じている。多田一臣氏は、「ただし以下、巻六編者の別資料による推定」とし、巻六の編者論にも繋がる指摘をしている。また興味深いことは、真下厚氏がこの歌に対し「歌びとしての采女が歌にまつわる話をふり捨てて新たな歌として生み出したのだと考えられる。「伝承から生成へ」という、声の歌の生熊の一端がここにかがわれるように思うのである。」と述べていることである。この歌が歌われ記され、更には或本にも記されていたということから、三方沙弥万葉歌の伝承性や歌の「生成」の一端がかがえるのである。

### 三、『古今和歌六帖』における三方沙弥万葉歌

では『古今和歌六帖』における三方沙弥万葉歌はどのような形で収録されているのか。まず『万葉集』一二三番歌に酷似する歌である『古今和歌六帖』第五帖の題「かみ」に載る次の三七四番歌がある。

たけばぬれたかねばながしいもがかみこのごろみぬにかぎり  
つらんか

この歌が「恋」の歌としてではなく「髪」の歌として収録されて

三方沙弥万葉歌の『古今和歌六帖』における伝承と受容

いることや、作者が未詳であることから、後世の人々はこの歌を万葉びとたちが受容した三方沙弥と園臣生羽の女との相聞として捉えるのではなく、歌独自の持つ力や歌に詠み込まれた「髪」に重きを置いていたことがうかがえる。しかしこの歌に関しては、三方沙弥万葉歌との大きな隔たりは感じられない。先にも述べたように『万葉集』一二三番歌は、三方沙弥の園臣生羽の娘に対する想いと、会えない生羽の娘が心変わりをしていないかという不安とが、「髪」を通して伝わってくる歌であり、三方沙弥万葉歌の時点においても「髪」がとても重要な役割をしており、「かみ」の題に収録されることも理解できる。一方、一二五番歌・一〇二七番歌に酷似する歌であるとして収録される『古今和歌六帖』歌はこのように容易には理解することができない。

その歌とは、『古今和歌六帖』第六帖の題「たちばな」に載る次の四二五八番歌である。

たちばなのもとにかけふむやとまたに物をぞおもふ人にしらす  
れず  
たかはしのやす丸

この歌と先の三方沙弥万葉歌とを見比べると、非常によく似ていることに気付く。しかしながら、先の『万葉集』一二五番歌や一〇二七番歌とは完全に一致しないのである。また作者が「たかはしのやす丸」とされていることや「たちばな」の題に載っている

ることも注目される。

続いて、この歌に関する先行研究の整理をし、それをふまえながら、『古今和歌六帖』における三方沙弥万葉歌について考へる。まずは天保二年、山本清明の『古今和歌六帖標注』の頭注には、

此名誤れり。今按ずるに、『万葉』六（一〇二七）に、  
橋本尔道履八衢尔物乎曾念人尔不知所知

右一首石大弁高橋安磨卿語云、故豊嶋采女之作也

とみゆ。此うたよく三方沙弥か歌に似たり。かつ左注に安磨とあるをよみあやまりて、こゝに「安磨」とは書るなるべし。

とあり、早く天保の時代から、作者「たかはしのやす丸」に関して、それが誤りであることを指摘している。『万葉集』巻六の一〇二七番歌を引き、高橋安磨という名が左注にあることから、それをよみ誤ったため「たかはしのやす丸」と書いたとも指摘している。また石塚龍磨稿・田林義信氏編の『校證古今歌六帖』には、

○萬葉二 十六丁（一二五）三方沙彌娶園臣生羽之女未經幾  
時臥病作哥橋之蔭履路乃八衢爾物乎曾念妹爾不相而 玉集戀  
一題不知三方沙彌五句妹にあはずして

萬葉六 卅七丁秋八月二十日宴右大臣橋家歌云々橋本爾道履

八衢爾物乎曾念人爾不知所知 右大辨高橋安磨卿語云故豊嶋采女之作也但或本云三方沙彌戀妻苑臣作歌也然則豊嶋采女當時當所口吟此歌歟 拾遺六帖云こゝに安丸歌とするは誤なり 夫木七橋題不知三方沙彌萬葉二の歌に同じ

とある。『校證古今歌六帖』は、『万葉集』一二五番歌と一〇二七番歌両歌を引き、先の『古今和歌六帖標注』と同じく作者名の誤りを指摘している。平井卓郎氏の『古今和歌六帖の研究』所収「古今和歌六帖と万葉集」には、

高橋安麻呂はこの歌の作者ではない。そして、豊嶋采女の作といふが或本に三方沙弥の作とあり、豊嶋采女が三方沙弥の歌を当時当所口吟したものであるといふことになる。当時当所、口吟とは何か。この歌の詞書を見ると、右大臣橋家の宴席においての歌なのであり、采女はこの歌の外にも詠んでゐる。宴に侍した采女が、恐らく三方沙弥の歌をその宴席にふさはしく（或ひは歌詞の一部を改めて）口吟したのであらう。第五句「ひとにしられつつ」（類）とも「しられねば」（古）ともあり、さまざまに伝えられたことがわかる。しかも六帖はそれらの何れでもない。巻二と巻六の歌が伝誦されてゆく途中において、いつの間にか混交して出来上つた姿を伝へたのが六帖の歌ではなからうか。

とあり、また同所収「作者名の問題」<sup>②</sup>には、

『万葉卷二(二五)三方沙弥の「橘の蔭ふむ路の」は六帖(第六四三三「たちばな」)では作者を「たかはしのやす丸」とする。これについては(中略)高橋安麻呂の作ではないが、万葉の左注にその名が記されてあるといふこと、またこの歌が万葉の卷二と卷六に見られる二つの形式において伝誦されたといふことがいへるのである。そして伝誦の途中において二つの歌が混同したもののやうである。作者もいつしか高橋安麻呂といふことになつたのであるが、しかしこの名も、その理由は別として、左注の中に存在してゐるのである。かうした姿を伝へたのが六帖である。

とある。平井卓郎氏も作者名の問題にふれるとともに、『古今和歌六帖』四二五八番歌である「たかはしのやす丸」の歌は、『万葉集』一二五番歌と一〇二七番歌が伝承されていく途中において混同したものであると指摘している。同じく「作者名の問題」として平井卓郎氏は、

極めて幼稚単純な原因で作者名が誤られるに至つたと推測されるもの。

と分類している。先にもみたようにこの「たかはしのやす丸」と

いう作者名は、誤りであるという認識であり、平井卓郎氏は更に強く「極めて幼稚単純な原因」での誤りであると指摘している。これら作者名の問題に関しては後にもふれることとする。中西進氏は『古今六帖の万葉歌』<sup>③</sup>において、

〔該当〕6一〇二七豊島采女、三方沙弥 〔酷似〕2一二五三方沙弥

と注する。『古今六帖の万葉歌』の凡例によると「該当」とは、『万葉集』該当歌のことで、いわゆる万葉歌と判定されるもとの『万葉集』歌であり、抽出した古今六帖歌とはほぼ同想で、約三句以上の類句をもつ『万葉集』歌であるとする。また「酷似」とは、『万葉集』酷似歌のことで、古今六帖歌または『万葉集』該当歌としてすでに掲げられた歌とほぼ三句以上の類句をもち、かつ類想ないしは類型的である『万葉集』歌。つまり、『万葉集』該当歌としてすでに掲げられた歌に比しては接近の度合が低い。『万葉集』類似歌よりも緊密な歌であるとする。『古今六帖の万葉歌』で中西進氏は、卷六の一〇二七番歌を該当歌とし、卷二の一二五番歌を酷似歌としている。「約三句以上の類句をもつ『万葉集』歌」である点については、一〇二七番歌も一二五番歌も同じである。ここで注目されるのが、該当歌としての条件である「抽出した古今六帖歌とはほぼ同想」という点である。三方沙弥万葉歌は『古今和歌六帖』では、「たちばな」の題のもとに収

められている。『万葉集』一二五番歌の背景には、三方沙弥と園臣生羽之女との相聞がある。しかし、『万葉集』一〇二七番歌にはそれが感じられず、土橋寛氏が、「橋の影踏む道」そのままでは諸兄に失礼なので「橋の本に道踏む」と改め、結句もその場にふさわしく「人に知らえず」と改めたと論じ、伊藤博氏も「橋家の宴席でこの歌が披露された点を思うならば、初句に「橋」の語が読み込まれていることを重視しなければならぬ。「橋」を冒頭に置くこの古歌は、主人諸兄への敬慕を込めて持ち出されたものに相違いない。」と指摘する。一〇二七番歌は「橋」の語が読み込まれていること、「橋」諸兄での宴席歌であることに重点が置かれているのである。すなわち、一〇二七番歌は三方沙弥と園臣生羽の女との相聞という受容から離れ、「橋」の歌という受容が作り上げられていったものと考えられるのである。三方沙弥万葉歌は、橋諸兄の宴席においてやや改められて披露されたことにより、「橋」の歌という意識が当時の人々に根付き、「古今和歌六帖』において「たちばな」の題として収められたのではなからうか。私も『万葉集』一〇二七番歌と『古今和歌六帖』の「たかはしのやす丸」歌はほぼ同様の歌であると考ええる。

以上みてきたように、『古今和歌六帖』の「たかはしのやす丸」歌は、三方沙弥万葉歌との関連性が古くから指摘されてきた。またあわせて、作者名を「誤り」とする論が展開されてきた。果たして作者を「たかはしのやす丸」とすることを単純な誤りとしてよいのであろうか。大久保正氏は、作者名の問題に関して「六帖

の作者名に誤脱の多いことは定評の通りであり、編者が作者名に關する限り杜撰な點のあつたことは否めないが、これを悉く六帖編者の過誤とのみすることはできず、さういふ傳承があつて、それに従つたために作者を異にした場合もあると考へられる。」と述べている。また、平井卓郎氏は先の『古今和歌六帖の研究』において「総じて六帖の編者は伝誦歌を扱ふ場合その伝誦歌詞を伝えるに忠実であつたと思ふ」とも述べている。平井卓郎氏は歌詞のみについて述べているが、作者名についても傳承においての作者名を忠実に伝えたとも考えることができるのではないだろうか。大久保正氏も述べているように、作者名の異同を『古今和歌六帖』編者の過誤とのみすることはできないのではないかと考える。『古今和歌六帖』がここで作者を「たかはしのやす丸」とするのは単純な誤りではなく、「たかはしのやす丸」が詠じた歌であるという傳承を忠実に伝えようとしたためであると考ええる。『万葉集』一〇二七番歌の左注をあらためてみると、

右一首右大辨高橋安麻呂卿語云 故豊嶋采女之作也 但或本云 三方沙弥戀妻苑臣作歌 然則豊嶋采女當時當所口吟此歌 歟

とあり、大臣橋諸兄の宅で開かれた宴で高橋安麻呂によつて詠じられ披露された歌なのである。豊嶋采女や三方沙弥の傳承についてもふれられているが、『万葉集』一二五番歌の三方沙弥歌から



考えると、一言一句違わずに伝承されていたとは考えにくい。そして、先にも述べたように、高橋安麻呂は橘諸兄の宴の場に相応しい歌になるように伝承歌を若干改作して詠じたのである。その時点で三方沙弥と園臣生羽の女との相聞の世界とは別の世界が作り出されていったのである。『古今和歌六帖』の「たかはしのやす丸」歌は、その背景にある歌を誰が詠じていたのかではなく、誰がその歌を詠じていたのかに重きを置き、歌の伝承とともにその歌を詠じた者をも含めて伝承され記された歌なのである。

#### おわりに

『万葉集』二二五番歌である三方沙弥万葉歌の伝承について、その異伝歌・伝承歌である『万葉集』一〇二七番歌、そして『古今和歌六帖』四二五八番歌の「たかはしのやす丸」歌についてふれ、はじめは園臣生羽の女との相聞として受容されていた三方沙弥万葉歌が、橘諸兄宅での宴席歌となり、「たちばな」を詠んだ代表的な歌として『古今和歌六帖』に収録された伝承過程を考えた。人々の歌の受容は、歌い語られていく伝承の過程で歌の詠まれる場や作者によって変化変容していくのである。『万葉集』二二五番歌において上二句である「橘之 蔭履路乃」は、次の「八衢」を起こす序詞であるとされている。この歌では、三方沙弥の恋心の様子を「八衢」に喩えて詠んでいる点が重要であり、「橘」は重要視されていない。しかし、一〇二七番歌になると、高橋安

麻呂が「橘」諸兄の宴の場に相応しい歌になるように改作し「橘」の語を重要視して詠んでいる。また『古今和歌六帖』四二五八番歌においても「橘」の歌として認識されるとともに「たかはしのやす丸」の歌として収録されている。三方沙弥万葉歌は『万葉集』巻二編纂時においては、園臣生羽の女との相聞、恋物語として人々に受容されており、『古今和歌六帖』編纂時には「橘」の歌として受容されていたことがうかがえるとともに、「たかはしのやす丸」の作とする伝承が存在したのである。また、『万葉集』に橘の語は、枕詞・地名・人名を除いて約七十例ある<sup>⑧</sup>。その約七十例の中から三方沙弥の伝承歌が、『古今和歌六帖』「たちばな」題の十首中の一首として取り上げられていることも、後世の人々が「橘」の歌として広く受容していたことを垣間見ることができるのである。『古今和歌六帖』の編纂者は、『万葉集』における万葉びとたちの歌の受容よりも編纂時において伝承されていたその時の歌の受容を重視したのではないだろうか。『万葉集』と『古今和歌六帖』の比較研究によって、万葉歌の伝承過程と後世の受容についてより深く考えることができるのである。万葉歌研究において『古今和歌六帖』をあわせ用いて研究することは、非常に有用であることをあらためて唱え結びとす

#### 注

(1) 「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観 第二巻』

- 角川書店、一九八四年、八六七頁
- (2) 平井卓郎『古今和歌六帖の研究』明治書院、一九六四年、五頁
- (3) 大久保正「古今和歌六帖の萬葉歌について」〔萬葉〕第23号、一九五七年四月、萬葉學會
- (4) 具廷鏞「古今和歌六帖の万葉歌―万葉集からの直接採録をめぐって―」〔文化継承学論集〕第2号、二〇〇六年三月、明治大学大学院文学研究科
- (5) 山田孝雄「萬葉集と古今六帖」〔萬葉〕第3号、一九五二年四月、萬葉學會
- (6) 注(3)と同じ。
- (7) 注(3)と同じ。
- (8) 後藤利雄「古今和歌六帖の編者と成立年代に就いて」〔國語と國文学〕第30巻第5号、一九五三年五月、東京大学国語国文学会
- (9) 青木太郎「古今和歌六帖」における万葉集歌についての一考察―題との比較を通して―(久保木哲夫編『古筆と和歌』、二〇〇八年、笠間書院)
- (10) 平井卓郎「古今六帖における万葉歌」〔國語と國文学〕第35巻第12号、一九五八年十二月、東京大学国語国文学会
- (11) 中西進『古今六帖の万葉歌』武蔵野書院、一九六四年、三頁
- (12) 河野頼人「万葉歌の伝誦―古今和歌六帖にみられるその類型の指摘をめぐって―」〔北九州大学文学部紀要〕第7号、一九七一年十二月、北九州大学文学部
- (13) 井上豊編『賀茂真淵全集 第一巻』「万葉考」続群書類従完成会、一九七七年、一一四頁
- (14) 川上富吉「三方沙弥伝考―還俗官僚の文学的伝記―」〔上代文学〕第34号、一九七四年四月、上代文学会
- (15) 寺川真知夫「禪師の恋―久米禪師の相聞をめぐって―」〔同志社国文学〕第48号、一九九八年三月、同志社大学国文学会
- (16) 題詞から一二四番歌も三方沙弥作の歌であるという解釈もできるがここでは留保する。
- (17) 阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義 第1巻』笠間書院、二〇〇六年、三〇五頁
- (18) 佐竹昭広他『新日本古典文学大系 萬葉集二』岩波書店、一九九九年、一〇四頁
- (19) 稲岡耕二『萬葉集全注 卷第二』有斐閣、一九八五年、一一二五頁
- (20) 稲岡耕二『和歌文学大系 萬葉集一』明治書院、一九九七年、八七頁
- (21) 阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義 第3巻』笠間書院、二〇〇七年、四三三頁
- (22) 伊藤博『萬葉集釋注 三』集英社、一九九六年、四六七

- 頁
- (23) 土橋寛『万葉開眼 上』日本放送出版協会、一九七八年、三〇頁
- (24) 伊藤博『萬葉集釋注 三』集英社、一九九六年、四六三頁
- (25) 多田一臣『万葉集全解 2』筑摩書房、二〇〇九年、四〇九頁
- (26) 真下厚「声の歌と『万葉集』」(『文学・語学』第173号、二〇〇二年七月、全国大学国語国文学会)
- (27) 伊藤一男『古今和歌六帖標注』翻刻(二二)「北海道教育大学紀要(人文科学・社会科学編)」第59巻第1号、二〇〇八年八月、北海道教育大学
- (28) 石塚龍麿稿・田林義信編『校證古今歌六帖(下)』石塚龍麿全集刊行會、一九五五年、四〇四頁・四〇五頁
- (29) 注(2) 七五頁
- (30) 同右、一八五頁
- (31) 同右、一八二頁
- (32) 注(11) 一三五頁
- (33) 注(3) と同じ。
- (34) 注(2) 六九頁
- (35) 注(18) と同じ。
- (36) 青木生子・橋本達雄監修、青木周平他『万葉ことば事典』大和書房、二〇〇一年、二五九頁

